日本刀「濃州堂 零式」

究極の刀が誕生。思いは進化を呼び覚ます！



濃州堂代表取締役
五十嵐啓司 氏

プロダクトデザイナー
水野健一 氏

今月号の表紙を飾るのは唯一無二の日本刀である。刀鍛冶の町・岐阜県関市の職人が製作したものだ。前代未聞といえる形状をデザインしたのは安城市在住のプロダクトデザイナー・水野健一氏であり、製作には刀剣店・居合道専門店「濃州堂」の代表取締役・五十嵐啓司氏が尽力した。「濃州堂　零式（ぜろしき）」（非売品）と命名された刀について――。

取材・文・構成／月岡洋光
撮影／窪田正仁



岐阜関刃物会館などを集積した複合施設「せきてらす」は2021年3月にオープン。近くには関鍛冶の刀剣などが展示された「関鍛冶伝承館」もある

愛知県豊田市在住のモーションコーディネーター・栢野忠夫氏から、「今すごい刀の製作に携わっています」と聞いたのは去年のことだった。今年4月中旬、件の刀のプレスリリースが



「せきてらす」に展示されている「零式」を取材日に久しぶりに手にとったデザイナーの水野氏「やっぱりカッコいいですね（笑）。誉れです」

なされた頃、栢野氏にその刀の写真を見せられたときは、想像を絶するフォルムに衝撃が走った。それが今号の表紙に掲載した〝日本刀〟（非売品）である。

弧を描く刀身は刃をあしらってはいないが、刀匠が折り返し鍛錬を経てつくり上げた逸品で、柄に収まる茎には「兼時作」と刀匠の銘が彫られている。研ぎや樋彫りも専門の職人による。柄は木地の上に鮫革が貼られ、柄巻きは柄巻師が豚革を使用して締めたもの。伝統工芸の職人が匠のわざを見せ、柄頭（表紙写真の下側）や縁金、鍔、切羽、鎺は優れた機械加工職人が製作した。腕を振るったのは刀鍛冶の町・刃物の町として知られる岐阜県関市の職人たちである。

自身、ものづくりにも携わり、剣術や刀にも深い思いを寄せる栢野氏が、安城市のデザイナー・水野健一氏と関市の刀剣店・居合道専門店「濃州堂」の五十嵐啓司氏を引き合わせたところから実際のプロジェクトは動き出した。1年の歳月をかけて完成したのが「濃州堂　零式」と命名された唯一無二の日本刀であり、現在、関市の「せきてらす」に展示されている。

日本刀は斬り合うための道具とみられがちだが、実際には「武士のお守り」として大切にされていたものだったようだ。宮城県の中鉢美術館・中鉢弘館長の話によれば、つくった人の銘が入った現存する最古の刀は約850年前のものらしく、以来、日本では世界で唯一武器に精神性を持たせるようになって、「刀を抜かないこと」、つまり我慢することを持ち手の意義とさせてきたという。「刃」に「心」があることを示す「忍」の字には、耐え忍ぶ意味があると中鉢館長は語ってくれた。

説明を聞いて以来、刀というものが平和思想の象徴にも思えていただけに、零式の円弧はシンボルとしてのそれが極まった形状のようにも感じられた次第である。長い歴史の中では、その時代を象徴するような刀の特徴が、切先、身幅、長さ、反りなどに現われてきた。切先のない形状は前代未聞といえども、それを〝刀の進化〟ととらえることはある種口マンといえまいか。人の思いが乗り、千年近くわざを継承してきた刀匠たちの手が加わっているのだから。

以下、デザインを手がけた水野氏と、製作に尽力した「濃州堂」五十嵐氏の二人に話を聞くとともに、栢野氏（トライマインド）の思いも紹介する。

刀匠の心を動かした凛として主張のある造形

談・水野健一

デザイナー・有限会社ディーウェーバー代表取締役



水野健一（みずの・けんいち）
1970年愛知県瀬戸市生まれ。商店の装飾会社や自動車関連会社でデザイナーとして従事、30歳で独立し、後に法人化。現在、有限会社D-WEBER 代表取締役。2017年より国内のものづくりとデザインの価値を高める活動に励み、職人や町工場とのコラボで生み出したデザインが世界で高く評価されている。ASIA DESIGN PRIZE 2021にて2作品がグランプリと金賞をダブル受賞するなど国内外で受賞経験多数

日本刀への冒涜を指摘されかねなかったプレゼン

2年前、栢野（忠夫）さんから私が運営するデザイン会社（D-WEBER）にアプローチがありました。「日本刀を削り出し（機械加工）でつくったので、見て何かアドバイスをもらえないか」と。評価をさせていただきましたが、技術にはすごいものがありましたし、ものづくりへの強い思いが感じられました。そんな最初のご縁をきっかけに、再び栢野さんから「実際の日本刀づくりの工房を見に行きませんか」とお誘いがあったのが約1年前でした。

そこで関市の濃州堂で五十嵐（啓司）さんとお会いしました。工場も見学しましたし、刀匠の工房も見せていただき、初めて本物の日本刀も拝見しました。実際に手にとらせていただきましたが、刃のついた真剣ですから怖さもありました。自分の気持ちが乱れてしまったら切れる危険性もあるわけです。逆に怖いものを持つことによって自分を律するような集中した気持ちになれます。人間の二面性と言いますか、自分の心次第でなんとでもなるということを刀に触れたときに感じました。

そんな中で、栢野さんから「未来に向けた刀を一緒につくりませんか？」というお誘いをいただきました。濃州堂さんを訪ねて思ったことのひとつは、日本刀というのは私が思っていた以上に需要があるんだなということでした。しかしそれでも五十嵐さんの話では、刀の世界も後継者問題は深刻化しているとのこと。実は私たちプロダクトデザイナー（プロダクトとは生産品、製品のこと）も後継者が少ないんです。同じデザインの仕事でも、若い人に人気があるのはグラフィックデザイナーとかアニメーションデザイナーとかゲームデザイナーですね。だから業界にカンフル剤になるような明るい材料が欲しいことはよく分かります。お誘いを受けて断る理由はありませんでした。

しかしその一方で、門外漢の私が刀というどこか神聖な世界に足を踏み入れていいものかという葛藤も正直ありました。その後、刀について調べれば調べるほどにどんなデザインにすべきか悩みは募っていきました。アニメやゲームのキャラクターが装備するような刀を提示したところで、職人さんに受け入れてもらえるとは思えませんでした。かといって、職人さんが造作なくつくってしまうようなものにはしたくない。むしろ、職人さんも舌を巻くようなもの、同業者の誰もが驚くようなもの、先につくられて悔しがられるようなものを創造したいという思いは、それまで携わってきた仕事でも必ず抱いてきたことであり、今回もその思いは根底に持ち続けていました。

悩んで悩み抜くと、原点回帰というのが自分の中に思い描け、職人さんそれぞれが究極のわざを凝縮したような塊を考えていったとき、ふと丸いかたちが頭に浮かんだんです。刺々（とげとげ）しくも派手（はで）派手（はで）しくもなく、凛として、しっかり主張がある造形。ループの形状は、継承というテーマも乗せられます。イメージもどんどんふくらんでいき、デザインを仕上げることができました。

栢野さん、五十嵐さん、刀匠はじめ職人の方々が集まる席でデザインを披露する日が来ました。プレゼンテーションのあいだ、誰も口を開きませんでした。重たい空気が流れ、「これは、



やってしまったな」と内心不安がよぎりました。実際、ネガティブな反応もありましたが、そんな中、刀匠から「これは、日本刀かい？」と改めて尋ねられました。「そうです」と答えると、「いいね」と。救われたのは、刀匠からの次のような前向きな言葉でした。

「これ、こうすればつくれそうだな」

驚きとともに、嬉しさが込み上げました。日本刀を冒涜していると怒られることも覚悟して臨んだプレゼンでした。職人さんの心を動かすことができたことへの嬉しさもありました。

重苦しい雰囲気が一変し、「やってみよう」という共感を得て、製作への道が開かれました。

日本刀零式が表現する究極の美と和する心

私のデザイン画から細部まで完成形を見通すのは難しさがあり、3D化もしましたが、それでも本物感が出ません。そこで、職人さんたちがもっとイメージを感じ取れるように、栢野さんが機械加工で試作品をつくってくださいました。それをもとにここはこうした方がつくりやすい、これはできるけど、これはできないといったディスカッションも深まっていきました。

職人さんは分業です。刀身をつくり上げるのは刀匠で、柄や柄巻きをはじめ金属部分の一つひとつに専門の職人が存在します。私は愛知県瀬戸市の生まれ。やはり職人の町で生まれ育ちましたが、陶器も同じように分業でした。子どもの頃からまわりは職人だらけでしたが、それと同じような光景が関市にも広がっていました。その中でうまくハンドリングしているのが五十嵐さんと感じました。職人さんたちがポリシーを持ってつくりあげたものをちゃんと汲み上げ、新たな仕事をとってきては職人さんにまわす――分業制において各々の職人が仕事に徹し、匠のわざを磨いていくというスタイルは、日本のお家芸ともいえる〝ものづくり〟を加速度的に発展させたような気がしています。

そんなものづくりに関心を持つ子が増えてくれれば嬉しいですし、日本刀づくりに関心を持ってくれる人が増え、その中の何人かでも、「刀をつくるという仕事があるのか」と気づきを得、それに携わる人が生まれてくることを今は望んでいます。私自身も、このような伝統工芸にデザイナーとして携われることが可能なんだという驚きがありましたし、同じようにデザイナーを目指す子が増えてくれれば嬉しく思います。

完成された零式を見たときは、ただただ感動しました。達成感もありましたし、私がデザインしたものを越えているなあという率直な感想も抱きました。それだけの技術をもった人たちが後継者に悩むというのはもったいないと心底思えました。

改めて振り返っても、デザインは私がしましたが、みんなの力が集まった結果の作品です。一人でも多くの人の目に触れて欲しいとの思いで、濃州堂さんの会社に置いていただくことを願いましたが、五十嵐さんの提案で始めた「せきてらす」さんと交渉がまとまり、そこで展示していただけることになりました。

今回、久しぶりに目にしましたが、やっぱりカッコいいですね（笑）。そして、美しい。刀の伝統美を失っていないところに、私の中では誇らしさも感じられるんです。

嗜好品や芸術品としての高い需要がある日本刀ですが、濃州堂零式は、それにも見合うよう永遠に受け継がれる工芸であること、そして、日本の戦いの道具が戦わない日本に昇華したことを示すかのように輪（和）をかたどって、究極の美を表現しています。水鏡のような神具を思わせるような雰囲気さえありますよね。

すでに海外のコンクールにノミネートされていますが、「サムライソード」に魅力を覚える人にはいいとしても、日本の武具と感じる人が見たときにどのような感情を抱くだろうという不安はないとはいえません。だから、エントリーシートに書いたんです。「武具としての日本刀はその役割を終え、いまは伝統工芸品であり嗜好品である」といった内容を。もちろん零が表現する〝刀の和する心〟を広く世界に発信できたらという気持ちは強くあります。

刀鍛冶の町・関市の力を世界に発信するために

談・五十嵐啓司

有限会社濃州堂代表取締役社長

刀身が二本もダメになった高難度の鍛冶作業

水野さんの考えとしては、これまで誰もつくったことのないもの、誰もつくれなかったものをデザインされたのだと思います。初めてデザイン画を見たときは驚きしかありませんでした。

零式を本物の刀としてつくろうという構想のもと、栢野さんが削り出し(機械加工)で試作をつくってくださいました。お二人が一生懸命準備をされて、「あとは五十嵐さん、頼むね」と。

いよいよ職人の方々が製作にとりかかるわけですが、困難な作業になるだろうことは明白でした。それでも、関市は長い歴史と伝統をもった刀鍛冶の町ですからね。その関の町からこんな見たこともない刀が誕生したというのは話題になると思いましたし、刀職人さんたちの素晴らしい技術をもっと多くの人に知ってもらいたいと考えました。

私が濃州堂の仕事を父親からバトンタッチをして引き継いだ頃は、関市の刀匠は20人いました。しかし今、刀匠は半分の10人になってしまっています。刀匠だけではなく、刀に関わる他の職方も同様に減ってきています。刀は一職方だけでは完成しないのです。

樋を彫る人、研をする人、柄を作る人、鞘を作る人、柄巻をする人、金具を作る人、鍔、目貫、縁頭、鋲、切羽等、それぞれの職方がそれぞれの仕事をして、ひと振りの刀ができあがります。一人欠けても刀は完成しません。

今、刀の世界も深刻な後継者不足の問題を抱えてきています。何もしないまま時が過ぎていくと、720年続いてきたこの関市の貴重な刀の文化は衰退していきます。刀を使用する武道の文化も守れなくなってしまいます。みんなで協力をして技術を継承していくための人づくり、需要と供給の人の育成が大切と考えます。

そんな中、刀の匠たちが一生懸命つくった話題性をもった刀が注目されれば、刀都の町、刃物の町・関市も関の刀職人も注目もされ活性化するのではないかと考え、刀の職人さんたちも、そんな思いをもって零式の刀製作を苦労して、時間を費やし、町おこしのために頑張ってくれたと思っています。とはいえ製作は大変でした。



弧を描くような刀身づくりは、刀匠にとっては本当に難しい作業だったと思います。刀は反ってはいますが、零式の刀の場合は反り過ぎですから(笑)。カーブの内側と外側とで幅の違いがあり、内側は縮めないといけないし、外側は広げないといけないので、叩いて叩いて、伸ばして伸ばして、作刀には奮闘しました。刀身に無理がかかれば刃切れを起こします。刃切れというのは、刀身に線状のクラック(裂け目)ができてしまうこと。その難しさがあって、刀身が二本もダメになってしまいました。

折り返し鍛錬をして焼きも入れ、刃文も入った刀身ですが、刃はつけてはいません。刃を薄くして切れるようにすると登録上の問題が出てきます。零式はあくまでオブジェ(飾り物)としての作刀になります。

零式の〝円のカーブ〟は職人泣かせで、樋を彫る職人も楕円の樋彫りには苦労させられました。研師にしても、鎬の角をつけるのは大変だったと思います。柄作りや柄巻きの職人も普段とは勝手が違い、反りがあるため相

当苦労されていました。

完成したときは達成感と感動で喜びが満ちあふれていました。みなさん本来の仕事がある中で時間を割いて作業に尽力くださったわけですが、完成品を目にした職人さんたちは一様にこうおっしゃっていました。

「もう二度とつくりたくない」

冗談めかしてはいましたが、それほど大変な仕事であったことは間違いないです。

文化を支える、濃州刀剣工房研修センターが始動

職方の育成に関して、刀の職方と協力し合って取り組み始めたことがあります。刀に興味を持っている人を集めて職方の仕事を体験していただけるような施設「濃州刀剣工房研修センター」の開設です。関市の貴重な刀の文化を守っていくための取り組みで、まだ準備段階ではありますが、刀剣に関する諸工作に興味のある人にいろいろ体験してもらえるような研修センターになればと考えています。

また、刀の鑑定の勉強会も講師の先生を招いて、刀の見方などのご指導をいただき、愛刀家も増やしていきたいと考えています。その他、国内外の人のための文化交流の活動の場所としても考えており、とくにインバウンドで海外からの人が関市を訪れる際に刀に興味を持ってもらえるように、刀の文化、歴史を説明し、刀の手入れ方法や見方にしても実際に刀を手にとっていただいて興味を深めてもらえたらと思っています。さらには、刀を使用する居合道、抜刀道の体験も希望があればしていただき、サムライ気分に浸ってもらいたいと考えています。

伝統ある関市の刀の文化、刀を使用する武道の文化を、みんなで協力をして守っていければ、と。720年続いてきた刀の文化を今の私たちの時代で終わらせることはできないので、みんなで力を合わせて技術の伝達、文化の継承、人の育成、需要と供給に力を注ぎ、次の世代にバトンタッチしていきたいですね。

関市には鵜飼もあれば、関善光寺もあり、刀剣も展示した関鍛冶伝承館もあります。加えて「せきてらす」に飾られた濃州堂零式を見て、芸術的な日本刀に驚いてもらえれば(笑)。

「関に行ったら鵜飼を見れた、刀も見れた、刀を手で触れることもできた、包丁もつくれた、武道も体験できた……」

そんな喜びの声が、関市を訪れた人たちからSNSを通じて世界に発信されれば市の観光振興にも結び付きます。関市の素晴らしい刀の文化、刃物の文化を多くの人たちに伝達できたら嬉しいですね。みんなの力で点と点を線にして、それが大きな面積になればと考えています。

私も居合道を修練していますが、居合道をこれから始めたいと考えている人がいる場合、居合道を始めるための刀の供給ができなければ刀を使用する武道も衰退していきます。居合刀がなくなれば居合もできなくなりますから、私としては供給が滞ることのないように惜しまず努力をしていきたいと考えています。近い将来、今当たり前のようにできていることができなくなる可能性もあります。できなくならないように次の一手を打ち出し、できることから前に進め、刀の文化、刀を使う武道文化を支えていけるよう努めていく所存です。

刀は、かつては一家にひと振りがありました。人を殺めるための道具ではありましたが、刀は象徴であり、誉れでもありました。人々の心や精神を支えるものでもあり、生きるも死ぬも紙一重、いつでも真剣勝負、自分の心構え、気構えを養うなど、刀は精神の涵養に通じました。

お守り刀や伝家の宝刀の言葉があるように、人や家を守る役目も刀は担いました。本来の刀の正しい文化、歴史を、武道を通じて正確に伝えていくことが大切であると感じます。濃州堂零式の刀を見た人がどのように感じられるかは人それぞれですが、感じたことを発信していただければ嬉しいですね。話題性を担ってくれる刀であることを願っています。



五十嵐啓司（いがらし・けいじ）
有限会社濃州堂代表取締役社長、居合道六段、杖道五段。居合道と杖道は神奈川の石堂倭文範士の勧めで42歳のときに始める。濃州堂は岐阜県関市にあり、居合用模擬刀の製造・販売・修理。小物販売、その他、日本刀（現代刀・時代刀）の販売・修理・諸工作も手掛けている。



本年５月に開設した濃州刀剣工房研修センター

思いの委ね処ができたことに感謝

文・栢野忠夫

○思いが形に

「刀が宿すものは自らの心を磨くところにある」という思いから、漫画に出てくる刃を人に向けない逆刃刀から、さらには自分の内側、心に刃を向ける「内刃刀」（刀の刀身に空洞を設けて、その淵に刃がある）というイメージが出てきて、この発想をデザイナーの水野さんに投げかけたのがきっかけで、「濃州堂　零式」が生まれました。

○思いの興り

ここに至る思いの興りは、息子が小2の時（2011年2月）に剣道を始めたところにあります。息子が剣道をしたいと言わなかったら再び剣道の世界に戻ることはなかったでしょう。

学生時代に剣道をしていた時（小5から高3）の経験から、現代を生き抜く心の力（他人を思いやる親切な心と人生を幸せに楽しく過ごす心）を養う場と感じていたので嬉しく思いました。しかし剣道教室に見学に行き、約30年ぶりに剣道を目にしたとき、私が経験した空気感とはまったく変わっていたことに衝撃を受けました。時代の流れはあれ、大切なものまで変わってしまった感じを受けて、「これでいいのか!?」という思いが湧き出てきました。

これをきっかけに、翌年、息子の「一緒にやろうよ！」の言葉で剣道を再開したのですが、最初に感じた思いがさらに膨らむ様子の多さに驚きました。人生の基盤を剣道で養われたと断言できる貴重な経験をしてきた私は、「剣が宿す本来の方向」について真剣に考えを深めていくようになっていきました。

○思いの宿し処

動きの理を探究する動理探究家として、骨格に着目した自然動法である体幹内操法の創始者として、2014年から剣道日本さんにお世話になり、剣への思いは次第に使命感の様相に変わっていきました。剣道日本2019年4月号の特集冒頭記事「日本刀は切り合いの道具にあらず。源流に平和思想があり、高い精神性を宿すとなると、そこを原点とする剣道が、何を目的とすべきかが見えてくる」という中鉢弘氏の話にも大いに感化されました。この号では、素振りを見直すべく私が考案した素振り用木刀製作のことも、付録DVD「新たなる木刀づくりに挑む」に収めていただきました。

遡って2013年には不思議な体験もしました。宮本武蔵の岡山県のお墓と福岡県のお墓にお参りし、霊巌洞に行ったときのことです。雲巌禅寺に入る手前で突然の強風が吹き、霊巌洞に入って奥の観音様の前に立ったとき「久しぶりだな、よく来たな」と声がした感じがあり、そこから溢れてきた涙が30分ほど止まらなくなりました。剣に対する使命感は増し、翌年、剣道日本の特集に初めて出せていただいたことに、何かの導きが感じられました。

○モノづくりの経験から実現

モノづくりサポートをさせていただいた金属加工会社の自社製品開発で「削り出しの刀身」を実現させた取り組みも、2021年5月号に「第三の刀の未来」として掲載していただきました。今回の零式に至るきっかけにもなった企画でした。この時に携わってくれた機械加工職人の加工技術があったからこそ、削り出しの見本の刀身を作ることができました。

○思いのプロジェクト

今回のプロジェクトは、デザイナーの水野さん、刀を製造販売されている五十嵐さん、金属加工を担当する私のメンバー3人で、「それぞれの思いを託し、費用はそれぞれで持ち合う」という私の勝手な申し出に同意していただけたことによって始動した、思いのエネルギーで推進するプロジェクトでした。

それぞれの思いを形として姿を現わせたのも、素晴らしいデザインを生み出していただいた水野さん、これを完成させるという強い信念で職人さん方と向き合いご尽力くださった五十嵐さん、携わっていただき無理を受け入れ困難を乗り越え実現していただいた職人さん方、困難とされる形を機械加工で削り出してくださった職人さん、展示等に際してご尽力いただいた方々、携わっていただいた方々のお陰と感謝しています。

○思いがひとつに

まずはデザインからスタートということで、私がお伝えしたコンセプト的な話から、水野さんには関市に何度も足を運んでいただき、刀と向き合い、生み出していただいたデザイン画を拝見したときは「かっこいい！」と見とれてしまうと同時に「私などが思い描く領域を突き抜けている！　さすがデザイナーさんは凄い！」と感動し、実現への情熱がより熱くなりました。

職人さんにプロジェクトの説明をするためには絵や図面ではイメージをつかみにくいので、私の担当である機械加工で試作モデルを造りました。デザインデータから部品構成を考えながら部品加工用のデータをつくり、各部品を製作し、刀身の完成イメージと柄巻きの検討、さらには組み付け状況の確認ができるように全部品を準備し組み付けました。

試作を見ながら完成形をイメージしていただき、プロジェクト説明会で職人さんを含めた関係者全員の思いがひとつになりました。

○思いの委ね処

「濃州堂　零式」の刃側が内側でなく外側についていますが、水野さんが感じられた「刀から感じる怖さ」を表わされているとのお話から、心を戒め律するためにはこの怖さが必要だと思い、当初の内刃に通じるところがあるので「なるほど、この方がいいな」と納得しました。さらに水野さんは「三種の神器の八咫鏡（やたのかがみ）を思わせる」といわれ、「円形状からそれが連想でき、刀身の映りに自らを映し出し、円の抜けに心を映し出すイメージがあり、刀身のデザインの流れが勾玉（まがたま）のようにも見えてくる、そこに刀の刃による心の戒めがある」「まさに、三種の神器が凝縮されている」と感じました。

さらには宮本武蔵の二刀流の二刀の剣先が交わり、柄頭が繋がり円となったように見え、刀を心に納める、五輪書が空に至るところを表わしているようにも感じました。これはまさに私の思いの委ね処と感じています。

「濃州堂　零式」の存在が、プロジェクトにかかわっていただいた皆様の思いと合わせて、私の思いを委ねさせていただき、日本刀が宿す本来の姿の伝承、モノづくり大国日本の復興など、日本の明るい未来を、和をもって切り拓きゆく礎となることを願います。